

1 普通授業の中で培うP I S A型読解力

以前から述べているのだが、P I S A型読解力という言葉が出てきたからといって、何かしら新しい学力観のようにとらえる必要はない。メソッドの指導やフィンランド教科書を活用した実践が多く見られるが、個人的には特設的にそれらの学習時間を設定するのではなく、普通授業の中で「読解力」ということの指導をしていく方が好ましいのではないかと考えている。なぜなら、P I S A型読解力といわれるものは、ある意味「流行」に左右されるものではなく、不易な学力であるにとらえるからである。不易な学力ならば、今後もその指導を進めていかねばならない。しかしながら、メソッドやフィンランド教科書を現在のような活用方法で指導しては、多分数年後には消えてしまっているのではないかと危惧している。普通授業は、今後も継続されるはずである。ならば、普通授業の中での「読解力」のあり方を模索する方が、不易な力という点から好ましいのではないだろうか。

勿論、メソッドやフィンランド教科書の活用については、メリットも大きいと考える。例えば、学習の道筋がある程度示されているため、指導者側にとっても扱いやすい。また、指導すべきことが明確になっていること（何を育てるということ）も、学校現場で注目される所以であろう。しかし、メソッドを今後継続的に行なうためには、現在のままでいいのだろうか。フィンランド教科書を活用することについても、日本とフィンランドという国の教育制度やカリキュラムなど様々な点で異なるということを念頭においての活用であろうか。そこまで言えば、国民性の違いなども視野に入れて指導すべきであるし、それを活用する指導者も、指導力向上の研修などについても実施の必要性を問わなければいけない。現在取り組まれている学校があるように思うが、日本版のメソッド本を作成することも必要かもしれない。むしろ、メソッドを教科書に取り込むことの方が、日常的な指導という点ではよいかもしれない。または、指導者自身が「思考活動」とはどのようなことなのかを、再認識することで授業の改善が図れるようにも思う。つまり、意識の改革が重要なポイントとなる。教師としての経験年数が長ければ、それまで培ってきた指導技術や考え方を簡単に修正することは難しい。しかし、事実から物を考え、結論を導き、表現するという大まかな学習過程の中に、目的に応じた「思考活動」があることに気づくべきである。思考活動の質を高めるとは、どういうことかを具体的に考えてみるのである。

そうは言うものの、普通授業の中でP I S A型読解力の指導をどのように取り組めばよいのかということになると、俄然話がややこしくなってくる。どうしても「新しい学力観」というとらえ方をしてしまうのではないだろうか。この場合、思考をリセットして、「考える」ということを丁寧に見直すことが必要である。そのためには、「考える」ために必要な事柄を、一度自分なりに文章化してみてもどうだろう。そもそもこの小論も自分の考えをまとめるために書き出したものである。書いているうちに、考えが整理されていく。余談だが、子どもたちに文を書かせるというのも、自分の考えを整理するという側面が大きいのではないだろうか。

2 授業構築の実際

前にも、『宇宙大作戦』というテレビ番組の話をしたことがあるが、覚えておいでだろうか。現在、再放送を深夜行なっているが、懐かしさの余りにハードディスクに録画して試している一人である。カーク船長とスポックの会話の中で、先日もカーク船長から意見を求められたスポックが、「論理を組み立てるには、事実の数が足りません」と返答している場面があった。ご存知の方も多いただろうが（ある程度の年代の方だけかもしれないが）、スポックはバルカン星人（正確には、バルカン星人と地球人のWなのだが）で、バルカン星人は感情や感覚的に物事を判断せず、論理的に思考し判断する。「論理を組み立てるためには、事実が足りない」というのは、情報としてできるだけたくさんの事実を材料に持っていないと、論理的な思考はできないということを示している。さらに、論理を組み立てるというのは、複数の事実を組み立てるということになる。さすが、スポックと思ったわけだが、スポックの一言というのは、非常に重要なポイントを示している。PISA型読解力についていろいろと考えていると、映像を見ていてもスポックの言動に敏感になっている自分に気づく。パート9でも書いているが、思考するためには、複数の事実が必要である。

さて、先日行なわれた本校の実践を例に、「思考」をどのように組み込んでいくのかを紹介してみよう。他にも実践例はあるのだが、既に幾つかの会社からの執筆原稿として出しているの、未公開のもということをご承知おき頂きたい。

教科：国語科 光村

学年：第5学年

単元名：伝え合って考えよう 人と「もの」のつき合い方

単元目標

自分と「もの」とのかかわりについて考えながら文章を読んで要旨をとらえ、自分の課題を持つことができるようにする。

自分の課題について調べたことを発表したり、友だちの発表を聞いたりして考えを深め、今の自分の生活を見つめ直して文章にまとめることができるようにする。

PISA型読解力育成に関わる指導目標

情報の取捨選択をし、理由を明確にして自分の考えを書けるようにする。

教科としての単元目標は、ここで論じる必要はないが、少なくとも普通授業の中で読解力の育成を図るならば、カリキュラム上のどの部分にPISA型読解力をプラスすればいいかは考えておかななくてはならない。この場合だと、2つ目の目標にある「調べたことを発表する」「考えを深める」「文章にまとめる」などが考えられる。勿論、1番目の目標にある「要旨」という部分でも論理的な思考は働くが、どの部分に重点を置いてPISA型読解力育成の指導をするのかは、指導者サイドで決めればよい。

本実践では、調べたことを元にして情報を集め、必要な情報をその中から抽出し自分の考えを表現する際に、その考えの根拠をいかにして明確にするか、一般化できるかをプラスの部分ととらえた。ペットボトルがごみとならないためには、どのようにすればよいのかを考えさせるのだが、その際に、まずどのように活用するのかを類別させる。さらに、大きく3つに類別したも

の「A = 別の用途で、使う（水筒など）」、「B = 加工して使う（植木鉢，もんどり，金魚鉢など）」、「C = 回収する」というわけ方を考えた。勿論，これは指導者の言葉であって，子どもたちにはそれに類する言葉であればよいとする。すなわち，ペットボトルをどのように活用・利用・処理したかで，それぞれの子どもたちの活用方法を子どもたち自身で類別させるのである。類別させて，どのような観点で類別したのかを，子どもたちに考えさせる。ここで，第一段階の「類別する」という思考が働く。次に，3つに類別されたな中から，それぞれの長所・短所を個人で考えさせる。普通なら，AからBまでの中で一番よいと考えられるものを選んでから，子どもたちに発表させる。それぞれ考えた結論を出し合って話し合いに持ち込むのである。しかし，PISA型読解力を意識して。思考を重層化させるといふ観点では，一人の子どもがABCそれぞれの長所・短所を出した上で，どの方法が好ましいのかを結論付けるのである。

3つの中からいきなり1つを選ばせることで，子どもたちの思考の中では，3つの事柄を比較してから選んでいるという風に指導者はとらえがちである。本当にそうであろうか。3つの事柄を一つ一つ丁寧に考えているとは思えないのである。または，考えていたとしても余り整理されているものではなく，感性和論理が混沌とした状態かもしれない。私が求めるのは，「Aでは，いいところがあります。1つ目は だからです。2つめは・・・・。困ることは，・・・なところ。Bのよいところは，・・・・。Cのよいところは，・・・・。ABCを比べると，Cが一番よい方法だと思います」といふようなものである。

本時に至るまでの学習は，次のようなものである。

伝え合って考えよう 人と「もの」のつき合い方 （全11時間）

- | | |
|-------|---|
| 第1時 | 教材文を読み，筆者の提案について感想文を書く。 |
| 第2・3時 | 江戸時代やマラウイの人たちの生活について読み取る。 |
| 第4時 | 自分が1日に出すごみを調べ，ごみを減らすための工夫を考える。 |
| 第5・6時 | 自分のごみを減らすための取組を発表する準備をする。 |
| 第7・8時 | 自分のごみを減らす取り組みについて発表する。 |
| 第9時 | いくつかの選択肢の中からもっとも適切だと思う方法を選び，その理由を明確にして自分の考えを書く。（本時） |
| 第10時 | 自分の作品を推敲する。 |
| 第11時 | 友だちの意見文を自分の考えと比べながら読み，自分の考えを深める。 |
-

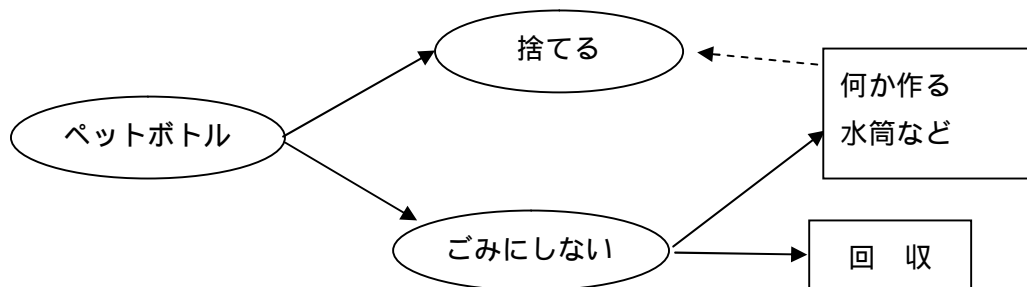
本時の目標：身の回りのごみや地域のごみを減らすために，自分には何ができるかを考え，文を書く。

PISA型読解力育成に関わる指導の目標

いくつかの選択肢の中から，もっとも適切だと思う方法を選び，その理由を明確にして自分の考えを書く。

本時の展開

本時の学習のめあてを「ペットボトルをごみにしないためのよりよい方法を考えよう」とした。なぜ、数あるごみの中からペットボトルにしたのだろうか。まず、1種類に絞る意味は、あらゆるごみを対象にすると、あまりに学習が広がりすぎると、子どもの思考の対象も広がってしまい、学習の共通点（土台）が曖昧になるのを避けるためである。1つの事物・事象を多面的に見ることを大切にした。次に、なぜその選んだ1種類がペットボトルなのか。これは、4年生のときに、社会科で勉強したごみの処理についての学習材だからである。何を選ぶのかは、それこそ子どもの実態や生活経験、その学校の特色などから考えればよい。留意すべき点は、選んだ学習材は、多様なものの見方ができるものなのかどうかである。例えば、ボールペンを取り上げると、使い切った後は、捨てるしかない。選択肢が極端に狭まるものは避けるべきである。そういう趣旨からすると、ペットボトルが一度使用されると下のようにその後の処理が分けられる。



実際の学習では、次のような展開となった。

子どもたちは、一日のごみ調べをして、ごみとして捨てられるものの中から、再利用できるものを探し出し、実際に作ったり、利用したりしていた。それらの中から、子どもたちにとって身近なペットボトルを共通の学習材として取り上げた。資料として、「1週間のペットボトルの平均的な使用量は、一人あたり1～2本、年間だと52本」というものを提示した。さらに、ペットボトルを自分たちの考えた「ごみにしない」方法を類別して、仲間分けを行なった。どのような分類の仕方があるのかは、子どもたちの言葉を利用したが、その結果

そのままペットボトル 回収 つくりかえる という3つに分けられた。その中身は、

そのままペットボトル・・・ボーリングのピン、調味料入、水遣りの容器、水筒・・・

回収・・・回収

つくりかえる・・・植木鉢、花瓶、小物入れ・・・

ここで、分類（類別）するということが行なわれたのだが、さらに上記の3つのうちから「ペットボトルをごみにしない方法としてよりよいものを選ぼう」という活動に移った。選択に先立って、それぞれの方法の長所・短所をメモさせた。そのメモをもとにして、集団の学び、すなわち自分たちの考えた「長所・短所」を交流しあった。ここでは、まだ3つの方法から1つを選択していない。それぞれの長所や短所がある程度出た段階で、1つ選択する作業に入った。これは、作文という形で、文章に表現する方法をとった。その結果、

そのままペットボトル・・・18名

回収・・・2名

つくりかえる・・・4名

という選択結果になり、作文を元に自分の選んだ理由を論理的に発表させた。

以上が、学習の大まかな流れだが、非常に興味深い意見が出ている。

A児：最初は、回収を選んだけど、回収すると自分の手を離れてしまう。自分で何かをしようというのなら、そのままペットボトルとして使った方がいい。使えなくなったときに、回収に出せばいい。

B児：回収がいいと思う。その理由は、そのまま使うにしても、何本も調味料入れがあっても仕方がない。1個調味料入れにしたなら、他のものは必要ない。作り変えても、何本もペットボトルがあれば、ペットボトルの植木鉢だらけになる。回収したら、他のものに生まれ変わるから、いいと思う。他の方法は、いずれごみになるだけだ。

C児：そのままペットボトルとして使うと、何もしなくても使えるし、ごみにならない。

自分と異なる考えに対して、自然に反論や賛同の意見が出てきた。残念ながら、45分の時間が迫ってきてしまったので、これからというところで授業が打ち切られた。次の時間に、話し合いが本格的に始まるはずである。

注目すべき点は、B児のように3つの方法の長所と短所を考える内に、最初考えていた結論が変わってしまった児童や、結論に対しての根拠がだんだん明確に書き加えるような児童が出てきたことである。ある児童は、「回収がいいと思うけど、教科書には人とももの付き合い方って書いてあったから、回収に出したらぼくとペットボトルの付き合いはそこで終わってしまうと思うんやけど」と小声で私に話をしてくれた男子児童。私は、偶然何人かに声をかけてこそこそ話をして、子どもたちの考えがゆれていることを知っている。しかし、黙って紙に向かっている子どもたちも、頭の中ではいろいろな葛藤があったのではないかと思っている。残念なことに、資料として掲示してあった「1週間のペットボトルの使用量」がうまく生かされていなかった。もし、このことを意識して、思考の材料として活用したならば、使用済みのペットボトルは莫大な数になり、そのままペットボトルとして使用するにも限度があることが分かったはずである。作り変えるという考えも同様の理由から排除されるのではないか。ところが、子どもたちの頭の中には、「自分ともものとの付き合いを切ってはならない」という、教科書の文が強く印象に残っているため、頭では回収がよいことが分かっているにもかかわらず、感情的に付き合いを大切にしたいというジレンマのようなものを感じた。評価という観点で見ると、そのような考え方を認めるのか否かは、意見の分かれるところではないだろうか。私も評価者であれば、非常に迷うところであるし、事実迷っている。

そもそも、学習材としてのペットボトルが、この学習の展開のなかで適当であったのかどうかも疑問である。教科書に載せられているテキストの主旨は、「物を大切にしよう」という提案である。例えば、着るものを大切にするというのなら、小さくなったから、誰かにあげようとか、雑巾にしようなどが考えられる。しかし、ペットボトルはそもそも中身を飲んだら「捨てる」ことを目的にして作られたものである。筆者が「物を大切にしよう」ということと対極にあるのが

ペットボトルの存在だともとれる。

私自身は、この実践にあたり、研究部の中で3つのものを比較するときには、それぞれの長所と短所を明確にして、その上で1つを選ぶことを強く推した。2つの比較ならば、比較的理由付けをした上で容易に1つを選択することができる。しかし、3つ以上のものを比較するとき、よく分からないものは余り考えることなく、選択肢からはずしてしまうのではないかと考えている。分かりやすい選択肢だけを残して、その中から選ぶのではないだろうか。それを避けるためにも、PISA型読解力育成において掲げている「熟考」を敢えてさせるべきであると考えたからである。一方、指導助言としておいでいただいた、皆さんもご存知の佛教大学准教授の達富氏は、この学習ではむしろ「類別する」ことに重点を置いたほうがよかったのではないかというご意見をお持ちである。このご意見についても、十分納得ができる。要するに、学習活動の中で、どこで「熟考」させるのが大切なのである。では、どこで、何を類別するのか。ペットボトルの再利用などの観点から、再利用の共通点を見出してグループ分けをするのであるが、詳細については各人で考えていただきたいと思う。

「考える」という活動を中心に授業を構築することを心がけると、どうしてもこれまでの授業の中で「思考活動」に対して曖昧であったかが明らかになってくる。また、考えるために必要な前提条件というものも、少しずつ見えてくるはずである。普通授業の中でPISA型読解力というものを育成しようというのは、至極真っ当な考えだと思うのだが、その分教科や単元の目標との関わりがうまく処理できないようである。その結果、PISA型読解力育成にが非常に難解な指導であるように映るのであろう。確かに、フィンランド教科書やメソッド本を使って指導すると、トレーニングという意味からは効果的であるし指導しやすい面もある。また、フィンランドの教科書についても非常に優れていることも認めている。ただ、日本の教育事情を鑑みての導入かどうかは再考する必要があるのではないだろうか。むしろ、トレーニングして培った力をどのように生かすのが問題である。個々の能力を伸ばせても、それらの能力を総合的に関連付けて生かすためにどのようなことをすればよいのが大切である。

「考える」ということを柱にして指導案などを立ててみてはどうだろうか。何度も繰り返すが、どのような考え方をを使うのか（比較、関係づけ、類別・・・）、どの場面で考えさせるのか、考えるための材料（事実）は揃っているのか ということを意識するだけでもずいぶんPISA型読解力の向上が図れると思うのだが。

翔鸞小学校トップページ <http://www.edu.city.kyoto.jp/hp/syoran-s/>

文責：京都市立翔鸞小学校 高宮 佳彦